
コウシンするプロパガンダ

人義守寒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コウシンするプロパガンダ

【Nコード】

N0440X

【作者名】

人義守寒

【あらすじ】

僅か七歳にして物理法則のほとんどを理解し天才と呼ばれた玉虫緑は、虐待、苛めを受け十四歳で自殺した。

緑の親友であった伯耆原悠馬はショックの余りに精神崩壊を起こしてしまい、奇跡的に立ち直った後も無気力な毎日を送っていた。

そして玉虫緑自殺から二年後、無気力ながらも順調に高校へと進み安定した毎日を過ごしていた伯耆原悠馬の元に一通のメールが届く。

プロパガンダに参加要請。勝利者には望むものを進呈致します

世界は既に崩壊を始めていた。

0 創始されるプロパガンダ（前書き）

作者の気合と乗りで始めた作品です。

0 創始されるプロパガンダ

世界は実に安定している。

物理法則は常に平常運行し、人間に発見されているもの、されていないもの全てが微妙なバランスでこの世界を成している。

数式は何千年も前から存在し、人々の生活を支え続ける。

食物連鎖は世界中で連続し続け、強者と弱者のバランスを取る。

全てが全て順調だ。

全てが全て安定している。

順調で、安定していて、ぶっ壊れている。

人が死に、動物が死に、機械は壊れ、鉄は錆び、石は削られ、意思が消され、意識は飛んで、歴史は改竄。

嘘が真で、真が嘘。

表はいつまでも表で、裏はいつまでも裏。

何て順調な世界だろう。

何て安定した世界だろう。

何てぶっ壊れた世界だろう。

全く、僕には勿体無いくらいだ。

そうだ、僕にはこんな世界はいらない。

僕にはあまりにも大きすぎ、手に余る世界だ。

これほど安定している世界で生きるのは、僕には力不足だったのだ。

僕には圧倒的に力が足りなかった。

ああ、何で神様は僕をこの世界に入れたのだろう？

僕にはとてもじゃないが、できないことだった。

ああ、もう無理だ。この世界が僕を追い出そうとする。

世界は僕を拒絶する。

ごめんね。

君は、君だけは世界で唯一僕を必要としてくれたね。

僕を守ろうとしてくれた。

でも、それも無駄だったんだ。

君は凄く強くて、凄く優しく、素晴らしい人だった。

最後まで伝えられなかったけど、僕はずっと君のことが好きだったんだよ。

大好きだった。

君は気づいてなかったかもしれないけど。

それでも良かった。

こんな僕が、人を好きになることができたんだから。

僕はとても幸せでした。

じゃあ、バイバイ。さようなら。

また来世、会えると良いね。

玉虫 緑（享年14歳）

その日、世界は安定を失った。

サンカするプロパガンダ

「帰りにいつものカフェよってかね？」

ダルさマックスやる気ゼロな礼を終えると、すぐさま卓也が近づいてきた。

学校の帰りは卓也や他数人の友人達と一緒に学校近くのカフェに行くことがこの高校に入ってからを通例となっている。

とはいえ、今日は父さん母さんが仕事で帰ってこない上、妹の咲は部活の合宿で三日間さよならバイバイ極楽天国。

ここまで家を自由にできる日は我が家ではそうそうありえない。

友人達との下らない談笑もいいが、この一年にあるかないかのラッキーデいを「下らない」で終わらすのは少し惜しかった。

「いや、今日はちょい用事があるんだよ」

「ん？ 何だよ、用事って。お前、ハーバード大学は諦めたんだろ？」

「誰が理容師志望だ」

俺が諦めたのはハーバード大学だ。

理容師を目指した記憶はない。

「今日の用事って言うのは、勉強のことじゃねえよ」

「じゃあ、何だよ？ 勉強以外にやることがあるっていつのか？」

「お前からそんな言葉を聞くとは思わなかったな」

「何を言う。俺は勉強大好きだぜ？ 勉強しまくりだぜ？」

「なるほど。ならばこの間の定期テスト五教科六科目合計点俺、五百九十七点」

「……三百七十八点」

「さすが勉強好きだな」

「いや違う。俺が勉強しているのは哲学方面なことだ！」

「なるほど。では問題ルキウス・アンナエウス・セネカの言葉『生涯をかけて学ぶべきことは』何だ？」

「自分が無知な人間だと知ることである」

こいつソクラテスの無知の知しか知らなかったな。

ちなみに正解は「生涯をかけて学ぶべきことは、死ぬことである」だ。

「残念ながら、馬鹿は死んでも直りそうにないな」

「なんだそりゃ？」

「いや、何でもない。さらばだ」

そついうと、俺は足早に教室を出て行った。

「ん？」

帰宅途中でコンビニ弁当を買い、さつさと食事を済ませた俺はパソコンの画面と向き合っていた。

家族が全員留守にしているし自由にできるぞ、と圧政から抜け出したフランス革命後の市民並に喜びを爆発させていた俺だったが、考えてみればたった一人家にいたところで遊ぶものも無く、やることも無くただただ暇な時間が有り余っているだけだった。

このままでは、家に一人という至高の時間が無駄に過ぎてしまい、今度はジャコバン派辺りが恐怖政治でも始めるかもしれない、と思った俺はとりあえずパソコンでもして時間を潰そうと思ったのだが、「何だ？ このメール」

いつもの癖でメールボックスを確認して、迷惑メールとそうじゃないメールを振り分けていたところ、奇妙なメールを見つけてしまったのだ。

「プロパガンダより参加要請。」

あて先：xxxxxxxxx@.ne.jp

プロパガンダに参加してください。

参加しない場合は自動的に敗北となります。

参加する場合は下記のアドレスよりプロパガンダ集会所へ。

xxxxxxxxxxxxxxxx

勝利者の景品は勝利者が望むものです。』

ここまでいい。

メールがここまでなら迷惑メールと即座に判断して、すぐさま削除ボックスにダンクシュートで叩き込んでいたことだろう。

しかしその続き。

『 P S 、勝利者には個別の副賞がつきます。

伯耆原悠馬様（おきな）の場合は、二年前の事件の犯人となっております。』

この文に対する疑問は二つ。

何故このメールの送り主は俺の名前をフルネームで知っているのか。

何故二年前の事件を 正確にはその犯人を、そして俺がその事件に関わっていることを 知っているのか。

ということだ。

犯人を知っているかどうかは分からない。

第一あの事件は自殺ということだったし、俺が精神崩壊状態から奇跡的に立ち直った後独自に調べてみてもやはり自殺としか思えなかった。

そんな事件の犯人を教えるとはどういうことだろう？

いや、二年前というからあの事件を思い浮かべてしまいが、もしかしたらそれ以外にも事件があったのかもしれない。

そして俺はその事件に何らかの形で関わっていて、精神崩壊状態だった俺にはその記憶が無いとか……。

いや、ありえない。

あの事件を調べる時に事件前後の新聞を全て熟読したが、俺が関わったという事件は無かった。

例え新聞に載るほど大きな事件ではなかったとして、そんな事件の犯人探しを俺が好んでやったとは思えないし、興味も持たない。

このメールの送り主が俺のことを良く知る人物であればその程度のことは予想できるはずだ。

だとすれば、やはりあの事件。

小学一年生にしてハーバード大学の入試試験でほぼ満点の点数を叩きだした、俺の数百倍のスペックを持つ超天才児にして、俺の無二の親友、玉虫緑の自殺事件しかありえない。

あの事件に犯人がいるというのか？

そしてこいつはその犯人を知っているというのか？

プロパガンダとは一体なんだ？

良く見てみればこのURL、WWWないしホスト名もドメイン名もない。ただの英数字の羅列だ。

ただの詐欺ならWWWが無かったりすることはあるが、ホストもドメインも無いなんて一体何を考えているんだろうか。

「……どうするかな」

両親は俺が二年前に精神崩壊を起こしたことから、緑の話題は完全にタブーになっていた。

別に今更その話をされたところで俺がどうなるというわけでもないが、両親は気を使って絶対に緑という言葉を使わなかった（若干笑い話になってしまいが、緑という単語がタブーになったため家では緑という言葉は全てグリーンに置き換えられた。そのため嬰兒がグリーン児になるなど伯耆原家独自の言葉が生まれた）。

このURLをクリックすることはつまり両親の意思に反して俺がもう一度あの事件と向き合うということになってしまう。

下手に手を出して失敗すれば、これまでさんざん心配してくれた家族に申し訳が立たない。

しかし、両親の気遣いは中々ありがたかったが、しかしその話題を避ければ避けるだけチラチラとその記憶が蘇ることがあったし、大体二年前の精神崩壊から立ち直ったといっても、既に人間のこと

を水素酸素炭素窒素その他もろもろの元素の動く塊としか認識できなくなってしまった俺が、精神崩壊から立ち直ったと言いがたいと思うのだ。

第一、既に壊れてしまったものが直るわけがない。一度割れたガラスは二度と戻らない。一度溶かして復元よみがえらせさせない限りは無理だ。つまり、壊れた心は死なないと治らない。

厄介なことだ。

まあ、死んでも直らない馬鹿よりはマシだけど。

何はともあれ、この事件と向き合って俺の心がもう一度壊れることはないのだ。

「……覗いてみるか」

玉虫緑のことは既にかこの存在だと自覚している。

壊れた心が戻らないことを容認できるのも、世の中は常に変化するものでそれは一人の人間が止められるものではない、ということ
を玉虫の事件が教えてくれたからだ。

だから、俺はあまり過去に執着しない。

決定された事柄に価値はないと思っている。

しかし、彼女　玉虫緑　の存在が俺にどれだけ多大な影響を与え、またどれだけ愛おしい存在であったかという事実は明確に過去を記録する脳みその一部分に記憶されている。いや刻まれている
といっても良いかもしれない。

兎に角、そんな存在であった彼女の死因が自殺でなく他殺であったとするならば、俺は如何なる手段を用いようともその犯人を探し出し我等がハムラビ法典に則って刑を執行しなくてはならないだろう。

「……えい」

そんなわけで。

そんな感じで。

俺は、そのURLをクリックしてしまったのであった。

セツメイするプロパガンダ

☞プロパガンダ：伯耆原様、ご参加いただきありがとうございます。
プロパガンダ：ここでは、プロパガンダのルールをお教えいたします。

プロパガンダ：プロパガンダとは

プロパガンダ：ご存知の通り人の思想、世論、行動等を特定のものへ誘導する宣伝行為のことを指し

プロパガンダ：元々はカトリックの布教聖省が用いた言葉で

プロパガンダ：ラテン語の *propagare*（繁殖させる）に由来いたします。

プロパガンダ：プロパガンダには

プロパガンダ：ホワイトプロパガンダ

プロパガンダ：ブラックプロパガンダ

プロパガンダ：グレイプロパガンダ

プロパガンダ：カウンタープロパガンダ

プロパガンダ：宗教プロパガンダ

プロパガンダ：など多くの種類があり、

プロパガンダ：有史以来、国家政治の上では必ずといってよいほど

プロパガンダ：その影を見ることができ、

プロパガンダ：また、時には戦争を引き起こすこともあります。

プロパガンダ：つい最近のことでは

プロパガンダ：第二次世界大戦時のナチスドイツ

プロパガンダ：同じく大日本帝国

プロパガンダ：それらと敵対したアメリカ合衆国

プロパガンダ：ソビエト連邦など

プロパガンダ：これら以外にも国家ならば

プロパガンダ：たとえ平和な国でさえ

プロパガンダ：プロパガンダの影を垣間見ることができるでしょ

う。

プロパガンダ：これから始まるゲームでは

プロパガンダ：伯耆原様を含むプレイヤー百人の皆様に

プロパガンダ：それぞれ与えられたプロパガンダを駆使していた
だけ

プロパガンダ：世界約七十億人の概念を操りながら

プロパガンダ：他のプレイヤーと争っていただきます。

プロパガンダ：与えられるプロパガンダはランダムで決められ

プロパガンダ：プロパガンダへの指示はこのサイトで行います。

プロパガンダ：そして、プロパガンダに送られた指示は

プロパガンダ：特別な経路を通り人間の脳へと伝わって

プロパガンダ：人の概念に影響します。

プロパガンダ：例えば、宗教プロパガンダの『仏教』を持つものは

プロパガンダ：このサイトを通じて指示を出すことで

プロパガンダ：全世界の人間を熱狂的な仏教信者にすることがで
きるのです。

プロパガンダ：これ以外にもプロパガンダには様々な概念があり、

プロパガンダ：それぞれ世界のどの地区の誰の概念をどういう風
に変えるのか

プロパガンダ：という指示を送ることで

プロパガンダ：自分の思い通りに変えることができます。

プロパガンダ：ただし、他のプレイヤーの概念を直接変えること
はできません。

プロパガンダ：そして、プロパガンダを用いて他のプレイヤーを
サバイバル形式で倒していき

プロパガンダ：最後まで生き残れば、勝利者となります。

プロパガンダ：説明は異常です。

プロパガンダ：質問はございますか？

」

サイトを開くと同時に、チャットのようなものがパソコンの画面に広がった。

その後は、こっちが何かを書き込む暇もない速度で上の文章が書き込まれていった。

何度か遡りながら、プロパガンダのルールを確認すると

1、ゲームにおいてプロパガンダとは人の概念に影響する能力のことである。

2、プロパガンダはこのサイトを通じて特定の指示を出すことで、世界中の人間に影響を与えられる。

3、ゲームの目的は上記のプロパガンダを用いて他のプレイヤーに勝利し、最後の一人となることである。

4、プロパガンダゲーム参加者は百人。

だ。

ここまで聞いて分からないこと。

プロパガンダについてはどういうものなのかは大体分かったし、中々理解しづらいが恐らくこのサイトを何回か利用することで慣れるだろう。

参加人数も、このゲームがどういうものかも分かった。となると、後分らないのは

『伯耆原悠馬 : ルールは大体分かったが

伯耆原悠馬 : 重要どころが抜けているぞ。

伯耆原悠馬 : 勝敗はどうやってつける？

』

『プロパガンダ : 勝敗は、敗北者の「敗北した」という気持ち

プロパガンダ : もしくは死によって決まります。』

『伯耆原悠馬 : つまりプレイヤーは他のプレイヤーに何らかの形

で敗北を認めさせれば良いのか?』

『プロパガンダ：はい。』

プロパガンダ：ただし、宣言させる必要はありません。

プロパガンダ：ただ敗北者がそう思えばよいのです。』

『伯耆原悠馬：なるほど。』

伯耆原悠馬：他のプレイヤーが敗北したという感情を持てば

伯耆原悠馬：そいつは敗北したことになるんだな。』

『プロパガンダ：はい。』

プロパガンダ：他に質問はございますか?』

『伯耆原悠馬：あと二、三あるな』

『プロパガンダ：どうぞ』

『伯耆原悠馬：まず、プレイヤーが百人いるというが

伯耆原悠馬：俺はそいつ等をどうやって特定すればいい?

伯耆原悠馬：このゲーム。

伯耆原悠馬：相手が分からないのと、相手がいないのは変わらないぞ?』

『プロパガンダ：それについては、これからプレイヤーの皆様が集まる

プロパガンダ：チャットにご案内します。

プロパガンダ：そこで様々な駆け引きを行い

プロパガンダ：敵の特定。他プレイヤーの誘導などをしてください。』

『伯耆原悠馬　：じゃあ、あと二つ一遍に訊こう。
伯耆原悠馬　：お前は誰で、どうやって世界中の人間の概念を操
る?』

『プロパガンダ：一つ目に関しては、このゲームの管理人とお答え
して置きます。

プロパガンダ：二つ目に関しては、このゲームに勝利してからお
答えいたします。

プロパガンダ：他に質問は?

』

『伯耆原悠馬：ない。』

『プロパガンダ：では、このウィンドウを閉じるか

プロパガンダ：「中二女子サイコー!」と叫ぶかのどちらかで

プロパガンダ：ゲームにログインしてください

』

俺は最後の文章が表示されるや否や、ウィンドウ右上にある「閉
じる」のボタンを全力で押した。

セツメイするプロパガンダ（後書き）

中々ゲーム本編に入れずすみません。
次回、ようやくゲーム開始です。

カイシするプロパガンダ

プロパガンダとの一対一のチャットが表示されたウィンドウを閉じると、それがスイッチとなっていたのかすぐさま新しいウィンドウが出てきた。

『プロパガンダプレイヤーチャット会場入り口
あなたのユーザーネームを入力してください』

「
ログイン

』

とりあえず、適等を書いておくか……。

『プロパガンダプレイヤーチャット会場入り口
あなたのユーザーネームを入力してください』

「
ログイン

』

入力してから、ログインと書かれたボタンをクリックする。

今度も一秒のタイムログすらなく、クリックとほぼ同時に新しい画面がディスプレイに開けた。

『プロパガンダプレイヤーチャット会場』と書かれたすぐ下に、大量の文字が整列している。

文字列の一番上には『「ほつきぼしさん（100人目）」がログインしました』と書かれていた。

どうやら俺が最後だったらしい。

……とりあえず、挨拶でもしておくか。

『ほつきぼし：こんにちは、ほつきぼしと言います。』

ほつきぼし：よろしく願います。

』

書きこんだすぐ後に九十九人分の挨拶が返ってきた。

まあ、何人かは傍観ロムッてるしているだろうから、正確に九十九人じゃないだろう。

しかしまあ、一つのチャットにこれだけの人数がいれば、十人十色ならぬ百人百色で色々な挨拶が返ってくるものだ。

『こちらこそよろしくお願いします』や『こんにちは』といった畏まったもの。

『よろ』とか『ヨロシク』といった親しい感じのもの。

『ファックユー！』や『ブチコロス』といった茶目っ気たっぷりのツンデレ。

『死んでください』とか『首切って来い』といったちょっと怖いヤンデレ。

『昨日から待ってたぞこの野郎！（一人目）』といった頑張り屋さん。

これ以外にも様々な挨拶がある。

とりあえず、ブロックメンさん（『やあこんにちは、ぼ きぼし さん』）は最初に脱落させる敗北者リストに載せておくとして。

この百人、全員が日本語でチャットしている。

全員日本人か？

困ったときは訊いてみる。

うちの家訓にあつたら横に（場合による）と書いておいて欲しい言葉だ。

『ほつきぼし：すみません。』

ほつきぼし：皆さん、日本人の方ですか？ 』

『リリス：いえ、私はアメリカ人ですよ』

『ニンジャ：俺はフランス人だよ』

『トマト：俺イタリア人だよ』

『ガナム：どうやら翻訳機能で全ての文字が自国の文字に
ガナム：翻訳されてるらしいんだよ（イギリス）』

『ワシ：まあ世界中の人間が百人もこのチャットにログインしているんだから

ワシ：それぐらい当然かもね（ドイツ）

』

いくつか関係ない会話が間に挟んだが、俺の答えに返ってきた答えはこれくらいらしい。

まあ、百人も人間がいれば返事をしない人間の方が多いだろうから、当然といえば当然。

しかしなるほど、やはり世界中の人間を操るわけだから、プレイヤーマも世界中から集められるわけか。

そんな感じで適等に考察していると、突然チャット画面の文字列が全て消え、代わりに新しい文字が浮かび出てきた。

『プロパガンダさんがログインしました』

来た。

ようやくゲームの開始宣言でもするのだろうか。

『プロパガンダ：お集まりの皆様

プロパガンダ：初めまして、ゲームの管理人プロパガンダでございます

プロパガンダ：それではこれより、ゲームを開始いたします。

プロパガンダ：ルールは前画面に書いてあった通りです。

プロパガンダ：プロパガンダの入力画面につきましては

プロパガンダ：開始宣言終了後、右下にあらわれるプロパガンダボタンをクリックすれば

プロパガンダ：画面が切り替わります。

プロパガンダ：また、ゲームの参加者については右上にカウンターがありますので

プロパガンダ：そのカウンターの数〃ゲーム参加者と認識してください。

プロパガンダ：それと、ルールの追加がなされたのでお知らせします。

プロパガンダ：「新ルール・プレイヤーは24時間以内に最低一回チャットに

プロパガンダ：書き込まなければならない」

プロパガンダ：これは黙りを続け、ゲームに参加しながら傍観者となるものを防ぐためのものです。

プロパガンダ：それではゲームを開始しましょう。」

『プロパガンダ：プロパガンダ、スタートです』

カイシするプロパガンダ（後書き）

ようやく開始宣言です。

ようやく次回から本編が始まります。

三話もプロローグ書いてすみませんでした。

それでは次回！『最終回 ケットウするプロパガンダ！』白い悪魔と赤い彗星』

ご期待ください！

このあとがきは一部フィクションです。

センセイするプロパガンダ

スタート。

と、書かれたものの、チャットだけでは対戦相手の情報も少なすぎ、とてもじゃないがプロパガンダを活用できそうもない。

そもそも、プロパガンダがどの程度人間に影響を与えられるのか分かっていないので探り探り、相手のことも含め探りまくらないと序盤は動けない。

ということで、とりあえず俺は寝た。

ていうか、チャットしている人がいなくなった。

それも当たり前で、考えてみればチャットに入ったのは俺が最後だったわけで、他の連中は昨日から待っていた組か、もしくは日本に近い時間帯組しかない。

日本の時刻は現在十二時三分。

昨日（ていうか一昨日）組は当然眠気が限界だっただろうし、日本近郊組も結構きつい時間だ。

それで、チャットしている人数が激減したのだ。

もう僅か数人しかない。

ならばチャットしていてもしょうがない。

俺は『おやすみなさい』と書き込み、すぐにベッドにもぐりこんだ。

そういえば、プロパガンダの言葉で気になったことがある。

プロパガンダはスタート宣言の最初に「初めまして」と言った。

あれはどういうことだろうか？ プロパガンダとはあのチャット画面に入る前に一対一のチャットをしていたし、それは他の連中も同じだろう。そうでなくてはフェアじゃない。

ならば、どうして初めましてと言ったのか。

ただの形式的なものなのか。

ああ、ねむ。明日考えよう。

明日は土曜日だし、余裕あるだろ。

翌朝五時、母親が俺を叩き起こした。

この場合の叩き起こすというのは激しく揺り起こす的な意味合いではなく、布団叩きを使い布団ごと俺を叩いた、という意味だ。

俺の優しい優しいお母様は、布団叩きで叩くというのは繊維を痛めるため逆効果だということはご存知だろうか？

ご存じなくとも、木の棒で布団ごと人を叩くというのは軽い虐待だということくらいはご存知であつて欲しい。

しかし、愛すべき俺のお母様はそんな俗世的なことご存じないのか、しばらく叩き続けやつと俺が起き上がったところに

「はよ起きろねぼすけっ！ 急いで降りないと間に合わないよっ！」と怒鳴り散らした。

全く、なるほどなるほど。そういうことが。

とりあえず納得した俺は「すみませんお母様、今すぐ降ります」

という日頃では絶対に言わないようなことを言つて母を引かせるとすぐさま階段を駆け下りて父を探した。

まあ、こんな時間に起きるとすれば十中八九あれだろう。

そう思いながら探し続け、やつと仏壇の前に正座する父を見つけた。

「遅いぞ」

と軽く怒られながら父の後ろに正座し、俺の横に母も正座する。

全員が揃ったところで父はお経を上げ始めた。

それを俺と母が正座して聞く。

一時間ほど経ちお経が終わると、黙つて飯を食い、父を送り出した後に自分の部屋へと戻った。

断つておくが、我が家は熱心な仏教信者ではない。

それどころか、仏壇の前で手を合わせるのは年に二度、お盆と正月のみである。しかも、正月に手を合わせるのは人ごみが嫌いな

で初詣に行くのが億劫なためその代わり、と言った意味合いが強い。つまり、我が家族は神様仏様など全く信じていないのだった。昨日までは。

まあ、ここまで言えば、というかここまで言わなくとも気付いていたであろうが、そうこれは恐らくプロパガンダの仕業である。

誰かが昨日のうちにその性能を試してみようと思ったのか、それとも先手必勝とも思ったのか、詳しくは知らないが、とにかくプレイヤーの誰かが『仏教のプロパガンダ』を発動したのだ。

これで、恐らく全世界の人間が仏教信者となった。

仏教と言ってもその系統は結構細かく分かれているので、正確にどれかはわからないが、なんにしてもこれは恐るべきことだ。

もし俺がちゃんと起きなければ、今頃俺は母親に叩き殺されていたかもしれない。

直接見ていない奴らは大袈裟だというかもしれないが、両親の目は間違いなく度を越えた狂信者の目だった。

例え殺生はいけないという仏教の教えに従い、生かされていたとしても恐らく今日は家に入れなかっただろう。そうすれば『二十四時間以内に一回チャットに参加』という新ルールにより、俺は敗北者となっていた。

やべえ。プロパガンダ超やべえ。

余りの衝撃に軽くキャラが崩れた。

まあなんにしてもこの先制攻撃が仏教という、俺の知識内の宗教で助かった。

世界三大宗教くらいならまだしも、本当に限られた地域で信仰されているような超マイナー宗教を発動されれば対応できなかったかもしれない。

下手をすれば、生贄にされていた。

怖っ！

命は大切にしましょう。

小学生のとき「胡散臭せえ」と思っていた言葉の重みを知った瞬

間だった。

とりあえず、パソコン起動。

例のメールからプロパガンダにアクセスすると、誰もいなかった。当然だろう。

ここは東端の島国だ。だから世界でも早くに朝が来る。

つまり、他の国の連中がこのプロパガンダの恐ろしさを味わうのはこれから言うことだろう。

実際人数を集計するカウンターを見ても、『98』と書かれているのでまだ二人しか減っていないことになる。

まあこの場合、この二人はほぼ百パーセント殺されたことになるのだけだ。

そう、殺された。狂信者に。

もし家を追い出されただけならば、昨日の十二時から二十四時間後、つまり今日の夜十二時にカウンターが減るはずだ。そうでないと言うことは、つまりこの二人は殺されたと言うことだ。

あ、いや違った。間違った。

敗北した、と心の中で思えばその時点で敗北したことになるのだから、こいつらはただ単に「自分は敗北した」「自分では勝てない」と思っただけかもしれない。

まあ、朝五時に起こされて「これはプロパガンダのせいだ」と思い至るような人間は俺を含めてもそういないだろうと思うけど。それに、そこまで思い至った人間なら、その後の行動で難なく生き残れると思うけど。

まあ、いいじゃないか。

人が生きている可能性が少しでもあるなら、喜ばしいことだ。

とりあえず俺は、画面の前で手を合わせ見も知らぬ二人の人間の冥福を祈っておいたのだった。

と、チャット画面を見ていると。

『ブロックメン：誰かいますかー』

ブロックメン：いたら返事してー
ブロックメン：もしくは「ペッタンコ胸サイコー」って言ってー」

変態が現れた。

つーか、昨日のあいっじゃないか。

生きていたのか。

ちっ。

しかもこいつ、この時間に起きていると言うことは日本に住んでいる可能性が高いな。

ああ、畜生。直接ぶっ殺しに行くかな。

そんなことを思いながら、俺はキーを叩いた。

カイワするプロパガンダ

『ほつきぼし：おはようございます。ブロックメンさん』

『ブロックメン：あ、おはようございます。ほつきぼしさん
ブロックメン：良かった、人いたんですね
』

とりあえず当たり障りのない挨拶。

いつかぶつ殺す相手であろうとも、今は仲良しアピールをしておかなければならない。

プロパガンダの影響力を知った今、下手に仲違いして相手がとんでもないプロパガンダを持っていたら困るからだ。

まあ、生き残りが一人のこのゲームにおいて、仲良しごっこなど大して意味がないが、それでもやらないよりはましだ。

『ブロックメン：なんか大変なことになっていますね。

ブロックメン：朝五時にうちのお婆ちゃんが「お経上げるぞ」って怒鳴り込んできたんですよ

ブロックメン：あの穏やかな性格のお婆ちゃんがですよ？

』

お前の婆ちゃんのことなんか知らねえよ。

『ほつきぼし：それは大変でしたね

ほつきぼし：うちも母親が朝っぱらから怒鳴り込んできて

ほつきぼし：普段はそんなことする人じゃないんですけどね……

ほつきぼし：なんていうか、恐ろしいですね。プロパガンダ

』

『ブロックメン：そうですね。』

ブロックメン：でも、今回の騒動でプロパガンダがどこまで影響力を持つのか

ブロックメン：分かりましたね

『

』ほつきぼし：はい。

ほつきぼし：しかし、ここまでの影響力を持つとなると

ほつきぼし：慎重に使わないといけませんね

ほつきぼし：いつ全人類が集団自殺するか分かったもんじゃない』

そう、このゲーム全人類の概念を操るというルール上、命令一つでプレイヤー以外の人類を全滅させることもできるのだ。

つまり

『ブロックメン：おやおや？』

ブロックメン：ほつきぼしさんは、見ず知らずの「全人類」さんのブロックメン：命を気にするような方だったんですか？

『

』ほつきぼし：そりゃあ気にしますよ

ほつきぼし：大事な駒がいなくなったらゲームになりませんからね

ほつきぼし：大きな賭けに出て全人類を犠牲にして

ほつきぼし：もし対戦相手が一人でも残ったら

ほつきぼし：そいつを探し当てる自信はありませんからね』

つまり、一度命令をしくじり全人類を自殺させてしまった場合、ゲームはその時点でストップし、世界のどこにいても知らない相手をひたすら探し続けるという、途方もない人探しゲームになってしまう。

そんなことはやってられない。

『ブロックメン：あらら

ブロックメン：ほうきぼしさんも良い感じにぶっ飛んだ方ですね
ブロックメン：全人類の命の価値はゲームの駒ですか？
』

『ほうきぼし：そもそも、私と会ったことのない人間の価値なんて
無価値ですよ

ほうきぼし：私と会わないのに、価値なんて付けられませんから

』

『ブロックメン：随分、主観的な考えですね
ブロックメン：まあ、私も似たような。というよりほとんど同じ
考えですが』

『ほうきぼし：そうでしょうね

ほうきぼし：そういう考えでないと、全人類を駒扱いするこのゲ
ームに

ほうきぼし：参加なんてできないでしょうから

』

そう、このゲームは全人類をただの駒とみなすゲームだ。

相当ぶっ飛んだ。例えば俺のような人間でなければ参加などでき
ない。

『ブロックメン：しかし、あなたに近しい人間はどうなんですか？』

『ほうきぼし：今のところ、出会った人間の価値は全員ゼロに近い
ですね

ほうきぼし：最高で小数点がつきます

」

ちなみに小数点獲得者は、妹の咲だ。

別にシスコンではないし、むしろ妹のことは心底嫌いだが、こいつの場合俺の話を聞こうとする。

他の奴は聞く前に諦める。

「ブロックメン：それは厳しいですね

ブロックメン：私もあまり良い判定はしていませんが

ブロックメン：少なくとも一人、百点満点中一万点を獲得した

ブロックメン：素晴らしい人材がいましたよ

」

「ほうきぼし：それは羨ましい

ほうきぼし：私も過去に一人、素晴らしい人がいたのですが

ほうきぼし：その人は既に亡くなっています

」

正確に言えば二年前にだが。

あいつはどうか？

百点満点で一億点越えてたかな。

「ブロックメン：それは残念だ

ブロックメン：おや？ カウンターが大分減りましたね」

「ほうきぼし：そうですね

」

と、書き込んでから、参加人数を表すカウンター表示を見る。
見て、流石に絶句した。

「人数カウンター 参加人数007人」

このプロパガンダ第一波は、一晩にして93名の敗北者を生んだ。

カイワするプロパガンダ（後書き）

本当はもう少し生き残りを増やす予定だったのですが、それでは大分長くなりそうなので減らしました。

シンリセンするプロパガンダ

『巫女：いやあ、びっくりしましたねえ』

『サイバー：そうっすね。』

サイバー：俺なんか、カフェで株チェックしてたら
サイバー：いきなり警察に「おいお前」でしたよ』

『スカイ：ああ、サイバーさんも株やってるんですか？』

スカイ：私も何で困りましたよお

スカイ：しかも見ました？ 三津林商業の株大暴落

『さんかく：見ました見ました！』

さんかく：あれもプロパガンダの影響なんですかね？

『サイバー：俺は、プロパガンダスタートと同時に手持ち全部売っ
といたんで

サイバー：ギリ回避しましたけどね

『スカイ：いいなあ

スカイ：私なんて、三津林に結構投資してたんで

スカイ：暴落直撃しましたよ。

スカイ：トライ（米）の株が同じだけ上がったんで、中和されま
したけど

『神様デッド：プロパガンダの影響と見て間違いない>さんかくさん
神様デッド：世界中に影響が出たため

神様デッド：誰が何をどうしたのかは不明

『巫女：うーん、皆さん株とか何とか難しい話してますねえ
巫女：他のお二人はどうですか？

』

『ブロックメン：私はそうですねえ

ブロックメン：なんにしても、競争者が一気に減ったのはラッキー
ですね
』

今回のプロパガンダで生き残った七人。

巫女、スカイ、さんかく、サイバー、神様デッド、ブロックメン。
そして俺。

夜中の十二時を回った時点で来たのは、やはりこれだけだった。
つまり、カウンターが壊れていたとか、そういうことでは……ない。
い。

しかしまあ、今回のプロパガンダは良く聞けば仏教だけではなく、
世界中で様々なプロパガンダが乱発していたようなのだ。

アメリカではノートパソコン禁止法がいきなり制定され。

ロシアでは状況による殺人承認法が制定。

中国では凄まじいインフレに見舞われ。

イタリアでは細長いという理由でパスタを食することが忌み嫌われ。
日本では各企業の株が急激に上下。

アジアでは仏教が。

アメリカでゾロアスター教が。

それぞれ大流行し、そこら中で坊さんを見かける。

さらに東京、ロンドン、ニューヨーク、北京でPC禁止条例が制定されたため、それらの都市に住むプレイヤーはほとんど全滅した
(生き残ったのはサイバーさんだけだ)。

プレイヤーを混乱の渦に巻き込んだプロパガンダの嵐は急速に拡大し、一晩のうちに97人の敗北者を生んだ。

さらには現在世界の宗教が変わり、均衡を保っていた国々の友好関係が崩れ、いくつかの大国が殺人を容認、軍備を拡張し始めたため、各国が一触即発の状態になった。

このままでは第三次世界大戦が起きる可能性がある。

『ほつきぼし：そうっすね

ほつきぼし：とりあえず、世界大戦起こったらゲームに集中できないんで

ほつきぼし：誰かどうにかしてくれませんか？

『

が、たとえ第三次世界大戦が起ころうと、そんなことは知ったことではない。

確かにインターネットが遮断され、自宅が爆撃の嵐に見舞われるのは余り容認できないが、とりあえずこのサイトへのアクセスは通常のネット回線ではなさそうなので、ノートPCである俺はゲームに何の支障もきたさない。

むしろ、タワー型など高性能デスクトップPCを使っている何人かが脱落し得をするとも言える。

だから、これは相手の手を探るかまかけだ。

まあ、魂胆が見え見えだけど。

『サイバー：そっすねえ。

サイバー：ほつきぼしさんのプロパガンダじゃ、どうにもならないんすか？』

『ほつきぼし：無理ですな

ほつきぼし：正直、理不尽と思えるくらい駄目駄目な能力ですよ』

『さんかく：へえ、どんなですか？』

『神様デッド：興味あるゝほうきぼし』

『ほうきぼし：そうやって探ってきてても駄目ですよ
ほうきぼし：教えるなら自分達から教えてください』

『巫女：まあ、そりやそうですよねえ』

『ブロックメン：ここですったことが本当だとは限りませんし』

『サイバー：そうっすよねえ』

『巫女：そうですねえ』

『ほうきぼし：皆さん、もう遅いですし寝ませんか？
ほうきぼし：この続きはまた明日ってことで』

『ブロックメン：いいですよ』

『神様デッド：賛同ゝほうきぼし』

『さんかく：もう明日って言うか今日ですけどね（笑）』

『巫女：じゃ、そういうことで』

巫女：お疲れ様でした
』

『サイバー：乙っす』

『神様デッド：乙』

『さんかく：お疲れ様でした』

『スカイ：乙です』

『ブロックメン：お疲れ様』

『ほうきぼし：お疲れ様です』

「ふう……」

ため息をついて時計を見る。

現在の時刻一時五分。

もしも他のプレイヤーが嘘をついていなかった場合。その居場所、少なくとも現在地は日本、もしくは日本に近い国の可能性が高い。

特に俺に賛同したブロックメン、神様デッド。それと反応を見せたさんかくはその可能性大だ。

そして、他のプレイヤーもその可能性に気がついていることだろう。

それを見抜いてわざと俺の誘いに乗った奴もいるかもしれない。

その場合俺の居場所が特定されるだろう。しかし、見抜いた奴が深読みして俺がヨーロッパ辺りにいるのにカマをかけたと思う可能性も高い。

まあ、なんにしても当面のターゲットは日本近郊に限られる。

残り七人。

ふむ、考察はこのくらいでいいか。

じゃ、おやすみ。

コウシンするプロパガンダ マイナスイチ（前書き）

長いです

コウシンするプロパガンダ マイナスイチ

「スカイ：皆さん。いますか？」

「ほうきぼし：こんにちはスカルさん

ほうきぼし：私達以外はまだ来ていないみたいですな」

「スカイ：そうですか……」

スカイ：ほうきぼしさんはその後何かありましたか？」

「ほうきぼし：いえ、特にないですね

ほうきぼし：あれだけ仏教に熱心だった両親も今では昔に戻っていますし

ほうきぼし：インターネットで調べても、もうプロパガンダの影響はほとんど残っていませんよね？」

「スカイ：そうですね。

スカイ：株の方も結構持ち直していますし

スカイ：あの嵐から皆さん少し自重なされているんでしょうか？」

「ほうきぼし：そうですね

ほうきぼし：私なんて、スタートからしばらく様子見決め込んでその後すぐにあれでしたから

ほうきぼし：まだプロパガンダ一回も使っていないんですよ（笑）

「スカイ：私もです（笑）

スカイ：私の予想では、数日はプレイヤー全員様子見かと思っていたんですけど

スカイ：大外れで。

スカイ：もう株やめようかな、とか本気で考えました（笑）』

『ほうきぼし：ああ、やっぱり株は先読みが大切ですからね（笑）
ほうきぼし：スカイさんはどういう経路でどこの株買ってるんですか？』

『スカイ：普通ですよ

スカイ：インターネットで取引してます

スカイ：最近買ったのは、三重工業と弥栄デパートとかだったかな？

スカイ：ほうきぼしさんも株とかやるんですか？』

『ほうきぼし：いえ、でもちよつと興味あるので

ほうきぼし：でも最近是不況なので、買おうかどうか迷ってます

……』

『スカイ：そうですね。

スカイ：まあ不況でも儲かっているところは世界のどこかに必ずあるんで

スカイ：ちゃんと慣れている人がやれば儲からない時代でもないんですけど

スカイ：今初心者の方が手を出されるのは危ないでしょうね』

『ほうきぼし：そうですね

ほうきぼし：それじゃ、今回は見送っておきます』

『スカイ：その方がいいかもですね。

スカイ：ほうきぼしさんは、他に趣味とかあるんですか？』

『ほつきぼし：そうですねえ

ほつきぼし：野球とかは好きですけど、うちの県は強豪校ばかりですし

ほつきぼし：入っても無駄かなって

ほつきぼし：まあ高校の数は多くないんで、可能性はくはないんですけど

ほつきぼし：あとは戦国時代ですかね

ほつきぼし：歴史好きなんで。毛利元就とか、尼子経久とか』

『スカイ：おや？

スカイ：ほつきぼしさんは高校生？』

『ほつきぼし：おっと、ばれちゃいましたか（笑）

ほつきぼし：まあこれくらいなら知られてもどうでもないですけど』

『スカイ：そうですね（笑）

スカイ：位置特定全然できません』

『ほつきぼし：そう簡単にはばらしませんよ』

『スカイ：ですよね

スカイ：あ、私ちょっと株見ないといけないんで、一回出ますね』

『ほつきぼし：ああ、はい。

ほつきぼし：じゃあ私も

ほつきぼし：乙でした』

『スカイ：乙です』

ほうきぼしさんがログアウトしました

スカイさんがログアウトしました

ノートPCで株価を見ながら、別のPCでプロパガンダの操作をする。

狙いは、ほうきぼし。

プロパガンダ『殺人に関する罪悪感』を使い、ほうきぼしを誰かに殺させる。

人間、生きていれば恨まれもするし、疎まれもするものだ。これを仕掛ければ確実に相手は殺される。

しかし、使った箇所にいる人間が多く殺される可能性があるので、プレイヤーの位置が特定できていなかった前回の「プロパガンダの嵐」の時には流石に使えなかった。

しかし、今回は違う。

大体の予想はついている。

野球の強豪校が多く存在し、しかし高校数自体は少なく、毛利元就、尼子経久と関係がある場所。

まだまだ高校生、そこまで考えが及ばなかったのだろう。無意識に晒してしまったのだろう。

未来ある高校生を死なせてしまふのは本当に残念だ。

しかし、千秋には未来がない。

プロパガンダの副賞、千秋の病気の治癒だけは何としても取らなければならぬのだ。

兄として、家族として、ここで妹よりも見ず知らずの高校生の命を優先するわけには行かない。

「ごめんなさい」

感情のこもらない声でつぶやき、俺はボタンを押した。

これで、明日にはあいつは死んでいるはずだ。

まずは一人目。

あと五人。

どうするか……。

「にゃー」

「ん？ どうしたみいちゃん」

数ヶ月前に千秋の友人から引き取った子猫が、不安げな声を上げる。

「大丈夫だぞ。きっと千秋はきっと良くなるからな」

そう言って、子猫を抱き上げながらあやしていると、突然メールを知らせる電子音が響いた。

「なんだ、こんな時に」

軽い怒りを覚えながら、メールボックスを開いてみる。

それは知らないアドレスからだった。

『こんにちはスカイさん。』

私はほうきぼしです。元気にしてますか？ それとももう脱落しちゃったかな？

なんにしても、ご愁傷様です。

スカイさんは私の提示した情報から、私の現在位置が日本の広島県、

もしくは中国地方周辺と見たのでしょうが、残念ながら外れです。残念でした。

そして、私のほうはあなたの提示した情報から、あなたの現在地を割り出しました。

駄目もとでやってみたんですが、まさか本当のことばかりだとはおもいませんでした。

正直言って、馬鹿ですね（笑）

ああ、すみません。謝ります。

あなたのメールアドレスは、あなたが使っているというインター

ネットの株取引サイトを片っ端から

クラッキングして、逆探知方式で割り出しました。

携帯のGPSにもクラッキングしたので、既に現在地もばれていきます。

高校生だからって油断しすぎましたねえ。

これでも数日前までハーバード大入学希望者だったんですよ、私。まあ専攻物理なんですけど、私の幼馴染に恐ろしいほど広く深い知識を持っていた奴がいたので

そいつから教えてもらった知識を使いました。

まあ、なんとというか、乙でした。それじゃ。

PS。

これはプレイヤー仲間としての忠告です。

死にたくなかったら早めに敗北認めたほうが良いですよ。

私のプロパガンダって「なんで

」

メールを読み終わって数分、俺は動けなかった。

何だ、こいつは？

高校生のくせにインターネット証券にクラッキング？

そこから逆探知？

何考えてやがるんだ。

そんなのクラッキングに詳しくない俺ですら相当難しいと分かる。というか、可能なのかどうか分からない。

なんだこの化物。

しかも何だこのプロパガンダ……。

こんなの、ほとんど反則じゃないか！

「にゃー」

みいが腕の中で不安げに鳴いていた。

「大丈夫、大丈夫だから」

震える手でみいの頭を撫でる。

みいは気持ち良さそうに、目を閉じた。

「……ゴメン、千秋ちゃん。兄ちゃん『負けちゃった』。でも、絶対一人にしねえから。だから、許してくれ」

「広島県での殺人多発事件については、未だに原因がつかめておらず、犯人被害者共に共通点も見られないとして、警察は『偶然』とは思えない」とのコメントをしています。

次のニュースです。

長野県大里大学で、昨夜末明大学生だった大空大地さん21歳の死体が発見されました。

大空さんはその先日妹の大空千秋さんを亡くしており、死亡したのが千秋さんの葬式翌日であること、死亡時刻が千秋さんと同じであることから、警察は千秋さんを亡くしたことによる精神的原因からの自殺と見て操作を進めています

ニュースキャスターが淡々とニュースを告げていた。

大空 スカイ、ね。

ありえるかなあ？

ありえるかもなあ。

まあ、俺には関係ないけど。

しかし、人の折角の忠告を無視しやがって、何て奴だろうスカイというやつは。

まあ、勝ったから良いけど。

「さてと、今日も元気にプロパガンダにアクセスしますか」
プレイヤーの人数が表示されるカウンターをみる。

006

ゴールまで、あと五人だ。

ケイカクするプロパガンダ

「よーよー、どうしたい？ 何で休日中連絡無しなんだよ」

プロパガンダの嵐が過ぎ、生き残り七人の顔合わせが終わりその翌日。

つまり月曜日。

スカイの脱落を確認した俺は、学校に来ていつもどおりの生活を終え下校時間となった。

が、それと同時に卓也がからんできた。

「色々忙しかつたんだよ。つーか、お前こそ休日には必ずメール入れてくるくせに、今回は全然ねえじゃねえか」

メールボックスを見てみても、神楽卓也かへらたくやという名前は一つもない。いつもであれば、休日の次の日はこの名前で埋まるはずだ。

「いや、まあ俺のほうはその、あれだ」

「何だよ」

「弟のさ、見舞いあるから」

「……ああ」

卓也の弟はもう小学五年生の年齢になるが、未だに学校に行っていない。病気なのだ。

常に寝たきりで生活しなければいけないわけではないらしいが、生まれつき体が弱いせいで、いつ病魔が暴れだすか分からないため、入院生活を余儀なくされていると聞いた。

しかしいつもであれば、例え弟の見舞いがあってもその後には遊ぶうとか言ってくる奴だったのだが……。

「弟、そんなに悪いのか？」

「あ、いやいや全然変わらねえよ。たださ、なんつーの俺にも色々あるんだよ。そうだ、今日も遊べないから」

「……あつそ。別にいいけどな俺にも用事あるし」

「おう、それは好都合」

何か違和感がある。

こいつ、そんなに用事がある奴だったか？

それに、例え用事があるうとこいつなら遊びに誘ってくるのではないか？

婆ちゃんの葬式があった次の日に「いつまで泣いてても蘇らないんだから、ぱ」と遊ぼうぜ！」とか言つて、母親に説教喰らつてたやつだぞ？

最新式のパソコン買ったのに外で遊んでばっかで、友人達に突っ込まれていた奴だぞ？

こいつにどんな用事があるって言つんだ？

……いや、人のことを口出しするのは良くないか。

それよりも、俺にはやるべきことがある。

こいつがかまってこないのはむしろ都合だ。

「じゃ、俺はもう帰るから」

「おう、またな悠馬」

そのまま俺は教室の出口まで行き、ふとある考えが浮かんだので振り返り卓也を見た。

卓也は「ん？」と首をかしげている。

「お前つてさ、チャットとかやる？」

「え？ まあ、やるけど？」

「……そっか、じゃあお前が参加しているチャット教えてくれよ」

「何だよ、突然。別にいいけどさ、教えるのはまた今度な」

「分かった、じゃ」

教室に背中を向けると、早足で階段を降り玄関に向かった。

落ち着かない心臓を抱えるようにして、前傾姿勢のまま急いで帰る。

ほぼ間違いない。

卓也は、プレイヤーだ。

少し前のあいつなら、チャットなんてやってない、と即答するはずだ。

それを肯定するなどありえない。

夏休みなど長期休暇を挟んでいたならば、長くあっていない間にやりはじめたのか、と納得できるが、わずか二日あっていないだけでチャットをやり始めたなんて。

それほどまでに卓也がチャットをやるといっのは俺からすれば異常事態なのだ。

だとすると、卓也のプレイヤー名は何か？

現在の参加プレイヤー名は……

ブロックメン

サイバー

神様デッド

さんかく

巫女

卓也の苗字は神楽だ。

神楽というのは「神事において神に奉納するために奏される歌舞」だったはず。

つまり神社に関係あること。

となると、あいつのプレイヤー名は巫女の可能性が高い。

今すぐ帰り、巫女のログインした時間帯を確認する。

あいつが今から家に帰ったとして、PC起動、メールボックスからチャットサイトへ、合計して計算すると、チャットに現れる時間は大体四時半から五時。

今すぐ帰り、巫女の到着を待たなければ。

卓也が先にログインする可能性は、俺の方が家は圧倒的に近いから大丈夫だ。

ほら、もう家が見えてきた！

急いで玄関を開け、家に入る。

「ただいま」と投げ捨てるかのようにリビングの前で言い、階段を上る。

自分の足が階段を叩く騒がしい音を聞きながら、頭の中で整理し

た。

卓也が現存プレイヤーであれば、それほど言いことはない。恐らくあいつの狙いは「願いを何でも叶える」という権利を使って弟を治すこと、もしくは副賞が弟を治す、ということだ。

副賞狙いの俺としては、「願い事を叶える」ほうを渡す代わりに協力しろといえ、戦力が単純に倍になる。

もし交渉が決裂しても、俺のプロパガンダはほぼ無敵だ。

一対一で卓也に遅れをとるような真似はしない。
行ける！

どちらにしても、勝利に大きく近づく！

考えに没頭しながら、俺はドアノブを捻り中に扉を開けた。

顔を上げるとそこにはピンクの壁紙と、俺の部屋には今も昔も将来も決しておかれないような特大熊のぬいぐるみがおいてあった。

視線を少し左にずらすと下は学校ジャージ、上は白いブラジャーという、明らかに途中で着替えるのも面倒臭くなりとりあえず座った、という感じで勉強机の前に座り呆然としている満身創痍な少女がいた。

妹の咲だった。

てか、部屋間違えた。

「な、なななな！」

ふむ、そういえばもう合宿から帰ってきていたのか。
巫女と卓也の関連性に没頭していた頭が少し冷えた。

妹のほうは逆に頭が熱くなっているようだ。

まあ、妹の裸を見たところで何も嬉しくはない。

とりあえず挨拶しよう。

「おかえりんごふっ！」

ギャグを交えつつ気さくに挨拶しようとした俺に対する返事は、特大ぬいぐるみを投げつけるというものだった。

「信じらんないっ！ 部屋に入る時はノックしてよ！ ていうか、入ってこないでよ！」

うむ、ご機嫌斜めだ。

ピサの斜塔並に傾いておられる。

早く巫女の件確認しなきゃいけないし、ここは一時撤退だな。
「分かった分かった。んじやな」

そう言つて、俺は自分の部屋へと退散した。

カイワするプロパガンダ 2

神様デッドさんがログアウトしました

ほつきぼしさんがログインしました

『ほつきぼし：……誰もいないですか？』

『ブロックメン：いますよー』

またお前かよ。

『ほつきぼし：ブロックメンさん。こんにちは』

『ブロックメン：こんにちは』

『ほつきぼし：二人だけですか？』

『ブロックメン：そうですね』

ブロックメン：神様デッドさんならついさっきまでいましたけど
ブロックメン：他の方はまだです

『

巫女もまだいない。

『ほつきぼし：そうですか』

『ブロックメン：そういえば前に素晴らしい知人が亡くなったと聞きました

ブロックメン：どういった方なんですか？

『

『ほつきぼし：小学五年生の時に物理学者とともに話し合い
ほつきぼし：論破するような人です

』

『ブロックメン：それはそれは

ブロックメン：化物のような人ですね』

『ほつきぼし：逆でしょう

ほつきぼし：彼女から見れば私達みたいな理解力のない人間が
ほつきぼし：下等生物に見えてしょうがなかったと思いますよ』

『ブロックメン：そうですかね……

ブロックメン：その方が亡くなったのっていつなんですか？』

『ほつきぼし：二年前ですね

ほつきぼし：海岸の崖から投身自殺です』

あのときのことは正直言つと良く覚えていない。

余りにもショックで精神崩壊を起こしたほどだったのだ。脳のどこかには蓄積されているだろうが、俺はそれを引き出すことを拒否している。

『ブロックメン：というと、もしかして玉虫緑さんの事件ですか？』

『ほつきぼし：はい』

『ブロックメン：死体が見つからなかったっていつ』

『ほつきぼし：はい』

そうだ。少し思い出した。
思い出してしまった。

玉虫緑の葬式、そこに遺体はなかった。

崖の上に靴が揃えておいてあったこと、崖の下の岩に玉虫緑の血痕が付いていた事、その日海が荒れていたことで、死んだ後に遺体が流されてしまったのだろう、と結論が出たのだった。

『ブロックメン：じゃあ、その玉虫緑さんと友人だったんですね』

……！？

『ほつきぼし：はい。そうですね』

ほつきぼし：友人でした
『

危なかった。

こいつ、玉虫緑のことを聞いて俺の居場所を特定しようとした。
つた。

既にその頃の家から引っ越しているが、玉虫緑が自殺した当初、俺は確かにあの崖の近くにある街に住んでいた。

そうでなくとも、もはや俺が日本人であることは隠しようがない。

『ブロックメン：それではそろそろ私も落ちますね』

『ほつきぼし：はい。お疲れ様でした』

ブロックメンさんがログアウトしました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0440x/>

コウシンするプロパガンダ

2011年10月8日10時59分発行